My 26 years in Izumi

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2023-02-14 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 佐藤, 篤 メールアドレス: 所属:
URL	https://tohoku-gakuin.repo.nii.ac.jp/records/24964

佐藤　篤（教養学部情報科学、勤続約26年）

泉キャンパス移転に想う

泉キャンパスの思い出

1989年４月の東北学院大学泉キャンパス。土樋の歴史あるキャンパスと対照的なたたずまいに、新たな歴史が刻まれようとする息吹を感じていました。巷の喧騒から離れ、キャンパス北側の林にはしかるべき自然が保たれ、一方、１号館、礼拝堂、２号館などで囲まれた空間には、人の知の歴史の重みを想起させる何かが感じられました。それからの30年、巡回する守衛さんの声がけがあるまでのほぼ毎晩、遅くまで研究室で過ごすことになりました。

泉キャンパスは教養学部設立を受けて構想されたキャンパスでしたので、教養学部教員は泉キャンパスに集結し、土樋の従来の学部との間で教育環境の違いは歴然としていました。ただ、いずれ法学部の教員も泉に移るという話もあり、環境の違いはいずれ是正されるものと漠然と感じてはいました。学部設立当時は３専攻１学科でした。人間・言語・情報の３専攻のうち、理学部出身の私は情報の教員として採用されていました。理工学系の教員に対して圧倒的多数の文系のなかで、いかにして市民権を得るかは悩ましい課題でしたが、教養学部を新しい総合的教育研究の場とするために諸先輩がたが入念に考察し、学部の理念としてカリキュラムに反映させていたことを知るに及んで、ようやく自分の立ち位置が見えてきました。“学際性”が一つのキーワードでした。自分の専門分野に閉じこもることなく、異分野との接点も意識し模索すること。それまで正確なデータを集めることに努めていた自分にとってはとても新鮮であり、教養学部に職を得たことを大変うれしく思いました。また、計測される数値などとは異なり、言葉で構成される理念の重さ、力を思い知ることにもなりました。これぞ文系の力なのだと勝手に分かった気になりました。

教養学部では、人気の人間と言語のお陰で、情報にも多様な学生が入ってきました。情報という看板でしたが、コンピュータを極めたいという純粋な動機の学生は以外と少なく、数学の教員志望の学生のほかには、多様な知識を広く学ぶことが入学の動機のようでした。

設立当初、情報専攻の施設も教員も３号館２階と４号館１，２，３階に分散していました。３号館２階では教員の研究室が並ぶ南側に対して、北側には就職課の学生相談の施設がありましたが、情報で生物学を担当されていた高橋彌穂先生が就職部長の時に、情報に明け渡した経緯があります。４号館の１階には生物学実験室、２階には化学と物理のそれぞれの実験室、また３階には地学実験室がありました。情報科学専攻になぜ自然科学の実験室がと、訝しく思われる

こともありましたが、これは当初の大学の構想にも拘わらず、文科省が認可に際し情報系の重視を指示したためでした。当初の構想では、学部のイメージは教育学部に近く、理科の免状のための実験施設が必要とされたのです。そして、この学科内の不整合性は笑い話で済まされるようなものではありませんでした。大学や文科省によって作り出された不整合性は教員間の不要な軋轢の震源となって、学科予算の配分の時期は特に憂鬱でした。なにしろ情報科学専攻には専門教育に使用するコンピュータをはじめ、事実上何一つ情報機器は設置されていませんでした。そのため、情報処理センターの機材が学部教育に使われるという変則的な形をとらざるを得なかったのです。幸いにして数年後、専攻主任をされていた武田暁先生のご尽力で、情報処理教育のための機材が設置されました。専攻立ち上げの時期に武田先生がおられたことがいかに幸運であったかと、返すがえす噛みしめています。また同時に、大学で学部学科を立ち上げるときの難しさも痛感しました。人間や言語の教員の間では学部の理念がしっかりと議論され、分かりやすく外部に提示していたのに対し、学部設立と同時に採用された私には、自然科学系の教員の間ではそのような努力が払われた形跡はあまり感じられませんでした。そのため、自らの立ち位置と情報という看板との乖離故の不要なエネルギーの消耗がその後長く付きまとう結果となったという印象が強いのです。本来であれば情報に配属される教員のあいだで十分議論し、専攻のビジョンを練りあげ社会にも十分資する専攻として構想されていれば、文科省も看板の付け替えを提案しなかったのではないか。教員の構想力が充分発揮されたときにのみ、魅力ある学部がうまれることを人間や言語の教員は証明してくれたと考えています。それに対して情報は残念なことに、逆に看板頼みの感がなかなかぬぐえませんでした。教訓として、教育研究の理念を教員間でしっかりと議論しボトムアップで共有することが、魅力的な教育環境の立ち上げるためには大切ということと思います。今回のキャンパス移転がどのように進展しているか、同じ反省の繰り返しにならないことを祈っています。

教員の悩みとは別に、学生は皆伸び伸びとしていたように思います。コンピュータ技術の習得や数学教員を志す学生には問題意識が明確な学生が多く、なにか面白そうなことをしようという学生は自然科学系の教員を指導教官として選択する傾向がありました。各教員はそれぞれの学生の興味関心に即して卒論のテーマを決めていたと思います。お蔭で私も多様な経験をさせてもらいました。例えば卒研の指導を契機としてコーヒーの焙煎に興味を持ち、現在も楽しんでいます。ただし、誤解のないよう付け加えれば、各自の好みに即したコーヒーになるよう焙煎の条件を遺伝的アルゴリズムで設定しておこうという研究です。意外だったのは卒研で少し遺伝子DNAにかかわった学生がコンピュータ専門の会社で評価され、その後同じように遺伝子DNAと関わりのある学生を採用したいと、同じ会社から何年間も話をいただいたことです。情報科学専攻の教育研究施設は３号館と４号館に分かれていましたが、物理、生物、地学、化学のそれぞれの実験室はすべて４号館にありました。それらの施設は情報科学科への改組の際に統廃合されましたが、いずれも実験環境として大変貴重で、教育研究に大いに貢献してくれました。

教養学部が発足して約２年後には、大学院の

準備が始まりました。当時の三浦教養学部長からの強い要望で生物学の小西和彦先生が着任されてほどなく辣腕を振るわれました。辣腕と称した理由は、高度な専門性を追求する大学院と、教養学部という分野を横断する総合性を追求する学部との連結には、両者のあいだの整合性を保つための概念と担当教員の選別が求められるからです。特に、大学院担当教員としての資格の認定には、それぞれの分野で高度な業績を充分有することが求められ、その資格認定には既存の学問分野の権威があたります。教養学部で新しい分野を切り開く意欲をもつ教員がどれほど正当に評価されるかには、はなはだ不安を残したままの作業であったと思います。小西先生の構想は、人間、言語、情報を下部階層として、その上の階層に下部からの縦割の構造を形成するという、多くの大学院で踏襲される形態ものではありませんでした。人間、及び人間集団としての社会、そして、それらを把握する手段としての情報と生命を、教育研究の３領域とし、入試時に志願者の希望を入念に確認した上で、本人の研究テーマに則してそれぞれ３領域から主及び副指導教員を選任するというものでした。これは分野横断的教育を標榜する教養学部の教育理念を踏襲し、発展させたものといえます。大学院での研究目的が明確で主体的に取り組む院生や、現場での多様な経験を有する社会人にとっては、得難い贅沢な環境であったと考えています。しかしながら、すべてが順調であったとはいいきれません。大学院担当の教員に分野による片寄りがあったこと、慢性的な定員割れに加えて、学部での学習を更に深化させたい院生と、異分野に初めて接する院生とが、同じ講義を受講することの難しさ、また、前期課程では授業科目の比重が高くなり、院生と指導教員との時間の確保にしわ寄せが生じるといった課題もありました。これらは本来解決不能なものではなく、教員の理解や柔軟な対応で対処可能なものと考えていました。

学部に話を戻すと、しばらくして教養学部の定員実質倍増が土樋から求められ、佐久間先生が大変な苦労をされました。設立時には人間、言語、情報、各60名、計180名定員だったかと思いますが、現在は400名を超えています。学生の質を落とさずにいかに学生を増やすかを熟考され、教養学部だけでなく、他学部も含め、いわば手つかずの領域として地域構想学科を立ち上げられ、学部の定員増を成し遂げられました。地域構想学科の特徴である地域発のボトムアップはこれからの社会でより重要なものとなることは間違いありません。それだけに、土樋移転でトップダウンの理念と混在することで、この特徴が見失われることがないよう、心から願っています。

泉キャンパスでの私の26年を振り返ると、山ほどの反省やお詫びが思い浮かびます。その多くは、本来私がやるべきことに気づかず見過ごしてしまったか、気づいていても適切に対応する能力に欠けていたか、余計で場違いなことしたか、あたりと思います。多くの教職員の方々に懺悔してまわらなければと今でも思っています。その上ではありますが、同時に山ほどの幸せな時間も頂いたことに深く感謝しています。また、在外研究の機会を頂いたことで私の長年の研究を納得できるものとすることができました。

五橋キャンパス移転に向けて

私は泉キャンパスが大好きでしたから、泉キャンパスで教養学が今後も続くことを願って

いました。また、長年の諸先生方の努力の結果、教養学部が東北学院大学をしょって立つだけの学部に成長していたとも感じています。泉を離れる理由、そして教養学部解体の理由の一部は理解している積りですが、どこか教養学部定員増と共通する動機を感じざるをえません。ある種の冷静さの欠如が気がかりです。分野横断的な総合性、創造性は教養学部という枠組みがあってこそ適切に機能したと思います。解体後も同じ輝きを保ち続けるために、今まで以上の新たな挑戦が始まるのだと思います。特に、異分野との学際性を重視してきた情報科学科は、今後は学部として、多様なデータの発掘・作成も含めデータの在り処を知り、情報を必要とする処を知り、真に必要な情報を提供する技術の開発を明確に意識する必要があるのだと思います。単なる数値データの処理技術で終わらない努力、AIに頼らず地に足が着いた意味の尊重なども求められるのだと思います。本来の情報は、社会を不可逆的に変化させるものであるからです。折角の機会でもあります。人間、言語、情報、地域構想が、それぞれ土樋キャンパスで大きく羽ばたくことを切に願っています。